
終わらない恋

MIW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わらない恋

【Nコード】

N1464I

【作者名】

MIW

【あらすじ】

実話をもとにした話。

一人の女の子が一人の男性に恋をする話。

想いが届くのか、片思いなのか、忘れることができるのか。

はじまりの恋

あなたは元気ですか？

あなたは何をしていますか？

あなたは私を覚えていますか？

あなたは恋をしていますか？

私は今でもあなたに恋をしています。

今でもあの時と変わらない恋を・・・。

あなたと出会ったのは約十年前。

それまでいろんな人と出会い、付き合ってきた。

でもいつも心のどこかにあなたがいた。

私を呼ぶ声が今も懐かしい。

たとえばあなたが遊びだったとしても私には本気の恋だった。

今でもあなたのそばにいたら何か変わっていたのかな。

今でもあなたのそばにいるのかな。

あなたの笑顔を見てるのかな。

そんなことを考えて、後悔してる自分がいる。

あなたに逢いたい。

夢でもいいからあなたの笑顔に逢いたい。

私はあの頃まだ十代だった。

まだ世間のことは何もわからない子供だったのかもしれない。

いつもあなたの周りには笑顔が溢れてて、遠くから見ただけで

あなたに惹かれてる自分がいた。

あなたと出会えたのは共通の知人の紹介。

「どうも」

初対面の人が苦手な私は何を言っているのかわからずにとまどっていた。

「名前は？」

気さくなあなたは笑顔で問いかけた。

「草加です」

慌てて答えた私に

「名字は？」

笑顔で私に聞いてきた。

「草加です」

くすつと笑ったあなたは

「草加草加って言うんだ。珍しいね」

つてわかってるのにわざとらしく言った。

「いえ。草加美和です」

うろたえた私を見て、大笑いしてた。

「俺は神田京司。よろしく」

それからあなたと話すようになり、親しくなり、ますます惹かれていった。

一緒にいると楽しくて京司といると時間が過ぎるのを早く感じた。そのころあなたに妻子がいることを知ったけど、知らない振りをしたの。知りたくなかったから、現実から目をそらしてた。

奥さんがいない時あなたは家に招待してくれたけど、行かなければと思った。なぜなら玄関には二人の結婚式の写真、部屋には子供の写真が飾られていたから。

私は何も知らなかったけど、必死にあなたを誘った。大人のあなたにはバレバレだったみたいだけど、写真から目を逸らすように私はあなたに抱かれた。

暖かくて引き締まった体。

初めての感触。

目が開けてられなくて、あなたを体で感じてた。

京司の運転で道を覚えて一人でも行けるようになるくらい通った。たまに苦手な料理を作ったり、ビデオを見たり、幸せな時を過ごした。

京司は別れてくれると言ってくれた。

それが本気なのかその場の嘘なのか今でもわからないけど、その時は嬉しかった。

すごく嬉しかった。

忘れられぬこと

桜が満開の春に初めて二人で旅行に行った。

二泊三日。場所は京都。

泊まるのは豪華なホテルでもなく、旅館でもなく、どこにでもあるようなラブホテル。

京司といわれればそれだけで幸せだったから場所なんて気にしない。使い捨てのカメラで写真を撮った。

カメラを向けるといろいろな表情をしてくれて、それが楽しくて何度も京司にカメラを向けた。

二人で撮った写真は私の大切な宝物になった。

清水寺、生八橋、抹茶のソフトクリーム、甘すぎたぜんざい、桜並木。

カメラの残りが少なくなつて、旅の終わりが近いのを感じる。

この旅が終わらなければと何度思っただろう。

朝起きたら隣には京司がいることが、何より幸せだった。

旅が終わってもこんな日々が続いたら・・・。

そんなことありえないのに・・・。

考えてしまう。

旅が終わり、何も変わらない日常が始まる。

駐車場で京司が来るのを待つて、いつも決まった場所に車を停めて、

駐車場から二人で歩いていく。

門をくぐり、更衣室までの道。

「首どうしたの？」

突然京司が切り出した。

気づかれたくなかった。

私の古い過去。

私は正直に話した。

「自分でやったの」

「ふん．．．なんで？」

「なにもかも嫌になったから」

「そっか」

沈黙が重かった。

「でももし目が見えなくなったら美和のことはわかるね」
私の首に手を当てて京司が言った。

「指で触れるとわかるから」

初めてそんな風に言われた私はびっくりした。

今までそんな風に言ってもらったことなかったから。

私は何も言えなかった。

京司が離れていかなかったことが、ただ嬉しかった。
変わらないでいられる。

まだそばにいられる。

しばらくして体調が良くない日が続いた。

毎月あるものがこないし、様子がおかしい。

まさかと思い、妊娠検査薬を試してみたら．．．。

陽性反応。

「．．．っつ」

京司の子供がお腹にいる。

嬉しかったけど、今の状況では産めるはずも無く、複雑だった。

「相談してみよ」

どこかで期待してた。

「産もう」って言うってくれるかも知れないって、でも現実には甘くない。
い。

妊娠したことを話したら、困った顔をされた。

私は耐えられなくて、京司の困った顔見ていたくなくて切り出した。
「おろしたほうがいいよね」

うつむいた京司は

「ごめん」

「今度病院行ってみる」

私は無理やり明るく言った。

「ついていくよ」

後日二人で病院に行った。

診察室に入るとベットに横になるように言われ、下着を脱いで、検査台に上がり、股を広げる。

何やら硬い金属をいれられ、のぞかれてるみたい。

「ああ・・・目の前の画面見て」

先生に言われるがまま小さいモニターを見ると、黒い画面に白い渦のようなものがいくつも見える。

「これわかる？」

矢印が一箇所で止まる。

「これが赤ちゃん」

あっさり言われた。

台から降りて先生と向かい合う。

「ここで産む？」

私はうつむいて

「産めないんです」

不思議そうに先生が

「どうしたの？」

「彼と結婚してないし、いろいろと問題があつて」

「そう・・・ここじゃおろせないから紹介状書くから持っていって」

「お願いします」

私が出て行こうとすると後ろから声がかかった。

「産めないなら避妊するなりちゃんとしなさい」

「私は産みたい」そう言いたかった。

私だって本当は産みたい。
おろしたくておろすんじゃない。
好きな人との命だし、大切にしたい。

先生から紹介状をもらい、別の病院に向かい、おろす日が決まった。
7月13日。

私はこの日を忘れない。
永遠に……。

当日も京司はついてきてくれた。
ここでやっぱり嫌って言ったら困るかな。
そんなことを考えながら時間が過ぎるのを待つ。
その間何度も口付けを交わし、気分を紛らわす。

時間が来た。
呼ばれた私はなんて言っているのかわからず
「いつてきます」
そんな言葉を残し、病室を出た。

自動ドアが開き、いろんな機械に囲まれたベットがある。
ベットに横たわると自動で動き、股が広がる。
「力抜いてください」
言われたとおり力を抜くと変な香りがした。
気がついたときには病室のベットだった。
終わった。
ただそう思った。

産まれなかった子供に京司は名前をつけてくれた。
「南月」
この世に一つしかない南に輝く月と同じ意味で「南月」

この世に私と京司の中で居続ける「南月」
消えない「南月」

毎年7月13日には心で手を合わせる。

お墓もなければ、何も残っていないけど、ただの自己満足なのかもしれないけど、私にはそれしか思いつかないから、これからも毎年7月13日には手を合わせる。

最初の別れ

私は現場が移動になり、京司とは別の棟で働くことになった。近くにいた分離れるのは寂しかった、だって新しいところには京司がない。

それだけで仕事のやる気は激減だった。

ただ飲みたいだけだろって感じだけど、歓迎会をやってくれることになり、あまり気がすすまなかったけど参加した。

どこに座っていいのかわからず部屋の隅で棒立ちになっていると小さいおっさんが隣に座れと手招きしてきた。

他に場所もなさそうだったので座ると目の前にいろんな料理が並べられてきて、ビールを飲みながらここは行くべきだと思いビール瓶片手にみんなの席を回り始めた。

誰の名前も覚えられなかったけど、いいことは小さいおっさんの隣から開放されたこと。

気づくとフルーツ盛りの前を陣取ってる人がいた。

お腹もいっぱいになってきたから、私も隣に座って食べ始める。甘いのやすっぱいのいろいろあったけど普通においしかった。

「そっいえば名前」

酒の力を借りて隣にいる人に話しかけてみる。

「名前は木本祐」

フルーツばかり食べている祐の第一印象は可愛かった。

「他のは食べないの？」

嫌そうな顔で

「好き嫌い多いからフルーツでいい、酒も飲めないし」

「ダメダメじゃん」

ふざけあいながら一応楽しい一時だった。

駐車場に向かうと京司が待っていてくれた。

私の頭をポンポンとたたきながら

「飲みすぎてない？」

「うん。大丈夫」

「ならいいけど」

「・・・なんか様子がおかしい。」

「じゃ、先帰る」

「ああ、バイバイ・・・気をつけてね」

たまたま近くに車を停めていた祐が気まずそうにしていた。近づいていつて話しかけようとする、祐から話した。

「あいつ結婚してるよ」

いきなりの話題でびっくりした。

さっきまでの気分が台無しになるくらい。

「知ってるよ。でも好きなの」

「知ってるんだ。悪いとか思わない？」

「私は・・・」

言えない。言葉がでなかった。

罪悪感なんか考えてなかった。

言われるまで好き同士が付き合うのは普通で、ただ相手には妻がいるだけ。

妻のことなんて考えてなかった。気持ちに誰かを気遣う余裕も無かった。

私は何も言えず車に向かい、そのまま帰宅した。
何も考える余裕が無い。

翌日普通に仕事が始まる。

罪悪感はない。それが私の答えだった。

昨日ずっと考えていたけど、私は京司を独占したい。
できれば今すぐ別れてもらいたいくらい、そんな相手の妻に罪悪感
などない。

昼休憩は京司と倉庫の隅で待ち合わせをするようになった。

「仕事はどう？」

「こっちでも男ばかりだよ」

「嫌なことあったら言いなよ」

「うん。ありがとう。大丈夫だよ」

罪悪感の件は言わなかった。

京司との一時は短かったけど、会えるだけで嬉しかった。

でもどこかで引つかかる物を感じながら、昼休憩は毎日同じ場所で
二人の時間を過ごした。

「まだ別れないの？いつ別れるの？」

「今はちよつと・・・」

こんな会話が多くなっていた。

待っているのが耐えられなくなっていたから。
もっと一緒にいたい。

他の人が京司のそばにいるのが嫌。

私は一人で感情と格闘していた。

待っている自分と待ってられない自分と。

少し距離をおこう。

私が決めたことだった。

気持ちが抑えられなくなりそうだったから、このままだと多くのも
のを傷つけ、失いそうだったから、そんな自分が怖くてそんな自分
からの逃げだったのかもしれない。

私は京司と別れた。

そんな時そばにいてくれたのが祐だった。
落ち込んだとき、悩んだとき、辛いとき、
気づくとそばにいたのは
祐だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1464i/>

終わらない恋

2010年10月22日02時23分発行